

# 北東アジアの白樺樹皮文化

—環境・社会・伝統・歴史からの北東アジア学—

井 上 治

はじめに

1. 前提—「白樺文書」と白樺樹皮利用の文化
2. 北東アジア社会における白樺樹皮の能力・機能とその消滅・衰退
3. 新たな「経済的現金収入能力」の獲得—資源価値の変化
4. なぜ「白樺樹皮を取らない」か？

おわりに

はじめに

本稿は、モンゴル人居住地域で近年相次いで発見されている「白樺文書」<sup>1</sup>を対象に、次の四点について論じることを目的とする。第一に、北東アジアの人間生活に白樺樹皮が担ってきた多様な機能を明らかにすることである。第二に、その利用の文化が消滅あるいは衰退の趨勢にある現状の原因を、白樺樹皮利用地域への紙・印刷技術・商品経済・石油化学製品の流入による利用機会の減少に加え、近年になって顕著になった環境破壊とそれに並行して流行する環境保護の実践、白樺樹皮利用地域の市場経済化に求める。第三に、白樺樹皮利用文化が完全に消滅するに至っていない現状は、近年顕著になったこれら三つの現象が支えていることを明らかにする。そして最後に、北東アジア学とはこの地域に生起している問題群を複合的かつ超域的に捉えて学際的にアプローチすることによって成立させること、北東アジア学の可能性のひとつとして“優位劣位の相互連関”を問う学問としての展開を期待することを述べる。

本稿の基礎となった2010年10月12日の報告は、ここ十年近く続けている白樺文書の

---

1 ここていう「白樺文書」とは、モンゴル文字が書き付けられた白樺の樹皮のことを指して用いる。後述のように、モンゴル人居住地域で発見されている「白樺文書」は、仏典や民間信仰と関係のあるテキストがほとんどであるが、ごく少数の法律や公私の用件を記したものもある。

解読の成果<sup>2</sup>と、現地調査<sup>3</sup>から得られた知見というしかるべき調査と研究の成果を踏まえてはいるものの、本格的な成果を未だに世に問うていない段階でなされた。モンゴルではその後も白樺文書が出土し、しかもその研究を筆者が継続して担当することとなった<sup>4</sup>。したがって筆者は、研究が一定の終了を迎える前という相変わらずの段階で本稿を執筆することとなった。しかし、上にも記したように、本稿の目的は、白樺文書の研究成果を公開することではなく、白樺文書の研究を事例に、北東アジア学の可能性の一端を論じるところにある。よって、白樺文書の研究成果の如何を問わず、白樺文書というアイテムとその研究方法を取り上げて、北東アジア地域をとらえる学問について考えることで、本稿に課された責任を全うすることができるであろうと考える。

## 1. 前提—「白樺文書」と白樺樹皮利用の文化

この部分では、筆者がこのテーマに着目するきっかけとなった、モンゴルの白樺文書から、北東アジアの白樺樹皮文化に興味を發展させていること、白樺という木とその北東アジア地域における分布、北東アジア地域における白樺樹皮使用の歴史と現状を簡単に紹介する。

### (1) 発端—モンゴルの「白樺文書」から北東アジアの白樺樹皮文化へ

筆者は、モンゴル国中部のハルボハ遺跡、同国西部のタヴァグチーン・オラーン遺跡、中国新疆ウイグル自治区西北部の通称「ジュンガル古城」（地図1）で発見された白樺文書の解読とその文化的背景の研究を、モンゴル国と中国の研究者とともにおこなってきた。

当初は、モンゴル文字テキストの解読のみを目的に設定し、かなりのテキストを解読することができた。またこれと同時に、白樺樹皮文献がどのような技術をもって制作されたかを明らかにしようと考えたが、筆者と共同研究者一同、白樺の樹皮に文字を書き付ける

---

2 筆者が関わっているモンゴル人居住地区で発見された白樺文書の研究は、鹿島学術振興財団平成12～13年研究助成「モンゴル国オブス県発見白樺樹皮文書の保存と研究」（代表：吉田順一）、三菱財団平成15～17年度人文科学研究助成「モンゴル国ボルガン県発見白樺文書の保存と研究」（代表：井上治）、科研費補助金2006年度～2009年度基盤研究（B）18401016「モンゴルの白樺樹皮文献と白樺樹皮文化に関する調査研究」（代表：井上治）、科研費補助金2011年度～2013年度基盤研究（B）23320155「新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成」（代表：松田孝一）の助成を受けて行っている。

3 現地調査は、科研費補助金2006年度～2009年度基盤研究（B）18401016「モンゴルの白樺樹皮文献と白樺樹皮文化に関する調査研究」（代表：井上治）採択期間中に実施した。

4 新たに発見された白樺文書の研究は、科研費補助金2011年度～2013年度基盤研究（B）23320155「新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成」（代表：松田孝一）により実施しているところである。

習慣が現在もなお残っているとの情報を得られないままであった。よって、白樺樹皮文献に拘泥せず、モンゴル人やモンゴル人と隣接関係にあるアジアの民族の白樺樹皮利活用文化の現状を調査することにも着手した。これを通じて、白樺樹皮文書の存在と衰退（消滅）の理由を探求できると考えたのである。2006年8月から9月、2007年5月、2008年8月、2009年8月から9月にかけて、モンゴル国西部のオブス県、中部のボルガン県、東北部のヘンティー県、中国新疆ウイグル自治区のアルタイ地区、タルバガタイ地区、イリ地区、中国内モンゴル自治区の根河市、オロチョン自治旗、モリダワー・ダウール族自治旗、エベンキ族自治旗、陳バルガ旗、新バルガ右旗、新バルガ左旗において延べ5か月の現地調査を行った。現在のところ、ロシアと朝鮮半島、日本での現地調査は実施していないが、白樺の植生や白樺樹皮製品の存在はすでに文献などにより確認してある。

## （2）北東アジアにひろがる白樺

日本でいう「白樺（しらかば）」は、温帯から亜寒帯地方に多く見られるカバノキ科 (Betulaceae) カバノキ属 (*Betula*) の植物のひとつであり、学名を *Betula platyphylla* という。日本では北海道・東北・甲信越に多く見られる。一説によると、世界にはカバノキ属が40種、分類によっては60種あり、アフガニスタン、中国、日本、カザフスタン、朝鮮半島（韓国・北朝鮮）、キルギズスタン、モンゴル、ネパール、ロシア、シッキム地方、ヨーロッパ、北米に広がっている。地図2の線で囲んだ北東アジア一帯には、「白樺」*Betula platyphylla* だけではなく、*Betula kamtschatica* や *Betula dahurica* という学名のカバノキ属の木が生育していることが示されている。

もう少し具体的に、筆者が主たるフィールドとしているモンゴルの、伝統医学に用いる植物の辞典を見てみると、モンゴルで生育するカバノキ属が二十近くあるとし、具体例として、*Betula platyphylla* Sukacz、*Betula hippolyti* Sukacz、*Betula mandshurica* (Regel) Nakai、*Betula microphylla* Bunge、*Betula reznitzenkoana* (Litv.) Schischk を取り上げて紹介し、薬効は樹皮にあると説明されている (Ligaa 1996: 97-99)。Virtual Guide to the Flora of Mongolia (<http://greif.uni-greifswald.de/floragreif/> [2012/01/09 アクセス]) には、これら五つのカバノキ属の木のモンゴル国における生育域が示されている (地図3-1~5)。植生が国境で寸断されることは考えがたいので、一部のカバノキ属の樹木は、北はシベリア、西はカザフスタンや新疆でも生育していると考えてよからう。また Flora of China (<http://hua.huh.harvard.edu/china/> [2012/01/09 アクセス]) の資料によると、これら五つのうちの三つが中国で生育しているとされており、紹介されている生育域は内モンゴル、中国東北地方、新疆、そしてロシア極東・シベリア、朝鮮北部、日本となっている (<http://hua.huh.harvard.edu/china/mss/volume04/BETULACEAE.published.pdf>: 21-31)。

カバノキ属は明るい場所を好む成長の早い木であり、高さは20~30m、幹は30cm~

1 m程でまっすぐに伸びる。山火事や伐採、山崩れなどで森林が消滅した場合、そのあとに真っ先に生える樹木の一つであるが、寿命は長くない。このような特徴を踏まえると、寿命の短い白樺は巨木に成長することは多くはないものの、野火・山火事が大きな問題となっているモンゴル、シベリア、中国東北地方では、再生のサイクルが早く、木材を迅速に提供する便利な樹木であると言えるのかも知れないが、一方では、原生林の伐採開発や人為的な森林火災による攪乱がなされた／なされつつあり、針葉樹が取って代わられてしまったことの証拠にもなっている（阿部ら 2004：31-32、バートルビレグ 2010）。

なお、カバノキ属に属する木は数種類あることや、考察の対象となっている事物がカバノキ属のどの樹木かが明確でないことに鑑み、以下では、カバノキ属を総称する語として「白樺」を用いることとする。

### （3）北東アジアの人々と白樺樹皮

モンゴル国ボルガン県のボルハン・トルゴイの遺跡から、白樺の芯に「福壽」という漢字が織り込まれた中国産の錦を貼った13世紀のモンゴル帝国時代にかかる帽子が発見された（写真2）<sup>5</sup>。モンゴルでは、白樺樹皮製器物の遺物は前3世紀から前1世紀の匈奴時代の弓器かと思われるものが出土している（写真3）。そればかりでなく、20世紀70年代くらいまでは白樺樹皮製器物は人々の実生活において活用されてきた（写真4）。

筆者が調査したモンゴル人、中国東北地方のダウール人、オロチョン人、エベンキ人、新疆のトゥバ人らは太古の昔から三、四十年くらい前までは、白樺の幹と樹皮を実生活に盛んに利用してきた。幹は、木材として家屋や食器、農牧機具、食品加工用具、車体部品などに用いられている（写真5-1～3）。樹皮は主に大小の器（大は衣服入れ、中は食品入れ、小は縫い針入れなど）を作るのに用いられ（写真6-1～3）、他に船・ゆりかご・家屋の外壁・車の屋根・楽器（笛）の材料、焼き付けやタールの原料などに用いられてきた。ユーラシア大陸の北半あるいは高地を代表する白樺の樹皮を用材とする文化は、日本<sup>6</sup>、北インドやチベット、ロシアやスカンジナビア半島、北米にもあり（写真7-1～3）、現代の国家レベルで考える北東アジアの空間を包摂している。

そして、上述した白樺文書の存在から、白樺樹皮の用途のなかに書写材を加えることができる。民族固有の文字を持っている場合には文字や図案を書き、文字を持たない民族の場合であっても美しい図案を書き付けたのであった（写真8-1～5）。植物由来の書写材としては、東アジア一帯に竹稈や木幹、植物繊維を粉碎し固めて作る紙があり、中国西南部から東南アジアには貝多羅葉がある（写真9-1～3）。すでに確認したように、書

5 モンゴル語で「ボグタグ・マルガイ (Bogtag malgai. ボグタグ帽)」という。Erdenebat 2006：111-116。とくに pp.114-115 の表1「モンゴルより発掘され研究された中世期モンゴル墳墓より発見されたボグタグ帽の出土物」に列挙されている24点すべてが白樺樹皮製である。

6 とくに日本における樹皮利用の文化については、名久井 1999 を参照。

写材としての白樺樹皮も、中国東北地方からロシア極東、シベリア、モンゴル、朝鮮半島、北インドやチベット、ロシアやスカンジナビア半島、北米に広がっており、竹簡、木簡、紙、貝多羅葉、パピルスなどとならぶ世界を代表する書写材である。書写材として白樺樹皮を用いる文化を有する範囲も、現代の国家を基準に考えた場合の北東アジアの空間を包摂している。

## 2. 北東アジア社会における白樺樹皮の能力・機能とその消滅・衰退

ここでは、上に示したような、現在までに確認されている北東アジアの人々による白樺樹皮利用の過去と現状を踏まえ、それらが北東アジアの社会に持った代表的な能力・機能を大きく二つに分けて把握し、その衰退あるいは消滅の過程を確認しておく。

### (1) 精神的な生活維持能力

モンゴルの白樺文書には、おおむね、人口に膾炙した仏典、民間信仰関連のテキスト、占いが記されている<sup>7</sup>。これらは、書き付けられた文字の字体やテキストの文法の特徴から、17世紀から18世紀にかけて書かれたものと考えられる。このようなテキストは、ひとり白樺文書だけに見られる特徴ではないといえる。すなわち、内モンゴル自治区包頭市のオロンスム遺跡（地図1）の仏塔跡から出土した17世紀の紙文書にも、やはり人口に膾炙した仏典、民間信仰関連のテキスト、占いが書かれている<sup>8</sup>。出土地点や書写材の違いによる内容上の明確な差はいまだ発見できておらず、いまのところ、17世紀以降のモンゴルの出土文書に“仏の教え”（仏典）と“祈り・願い”（民間信仰関連のテキスト、占い）が共通して発見される理由は明らかになっていない<sup>9</sup>。

たとえば、人口に膾炙した経典としては、大乘仏教の心髄、とくに空の思想を説く『般若心経』がある。これは民間では「靈験あらたかな」経典とされ、お守りや疾病平癒祈願に用いられた。『金光明経』は空の思想を基調とし、この経を広めまた読誦して正法をもって国王が施政すれば国は豊かになり、四天王をはじめ弁才天や吉祥天、堅牢地神などの諸

7 Chiodo 2000, Chiodo 2009 に取められている白樺樹皮文献のジャンルからそのように判断している。

8 Heissig 1976 に取められている出土文書のジャンルからそのように判断している。

9 ただし、最近発見されたハルボハ遺跡出土の白樺文書に混じって紙文書が出土した。現在修復処理中であることからその内容を完全に明らかにできる段階に至っていないが、木版で印刷されたモンゴル語・チベット語対照文献の断片が含まれている。筆者の知る限りでは、木版で白樺樹皮に印刷した出土品は確認されていない。白樺樹皮を加工して紙のような均等の厚さを保った平面を作り出すことは難しく、白樺樹皮由来擬紙製品大量生産技術も存在しないので、印刷には紙の方がより適しているだろう。白樺樹皮と紙の機能的違いの一つはこの点にあるのかもしれない。

天善神が国を守護すると説くもので、国体護持、国王の安泰、国家の繁栄、民の幸福に利益あるとされた。『天地八陽神呪経』は8世紀前半に中国で撰述された経典で、日常生活の招福除禍をうたい、読誦・書写・教説の効験を説き、民衆の俗信に適合したものである。

民間信仰関係のテキストは、信仰・崇拜の対象となる何らかの聖なる物（たとえば山川、歴史上の偉人、伝説上の英雄、高僧、天や仏など）に香を焚き供物を捧げて、無病息災、悪事退散、家内安泰、満願成就、贖罪を乞うための“願文”が多い。このようなテキストは正統な仏典としてモンゴル語の大蔵経に収められていない可能性が極めて高いが、モンゴル人の仏教信仰と自然崇拜、生業のありかた、そして、それらの間の相互関係を反映していると思われる。

占いの多くは、人々の起こそうとする「何らかの行動」に適した／適さない日や方向を示したもので、つまり吉日吉方占いである。「何らかの行動」の典型的な例としては、出立、婚礼、住居の新築、服の仕立て始めなど、かつてのモンゴル人が送っていた日常生活の諸局面を取り上げている。占いに託される日常生活の諸局面とは、とりもなおさずモンゴル人がそれらに抱いている一定の価値観を反映していると見てよい。

上述した三つのジャンルに共通しているのは、どれも民間色が極めて強い、あるいは民衆とその生活に密接に関わるテキストという点である。前近代のモンゴルの民衆はほとんどが非識字者であったため、このような民衆向けの仏教色を帯びたテキストの運用主体はラマであったと考えてよい。そして、モンゴル人の精神生活の中心にあり続ける仏教（ラマ）と生活の現場を結んだテキストの文字としての定着を担ったのが白樺樹皮であった。しかし、白樺樹皮上のあらゆるテキストを全くの仏教的なものとしてとらえることはできない。護符の作成法を記したモンゴル・チベット合璧の写本数点がモンゴルで発見されている。この写本には、ある目的に効果のある呪文やダイヤグラムを「白樺樹皮に書いて」護符として身につけるよう指示されている（Ochir 2011：380-394）。どうして白樺樹皮なのか。それは、白樺樹皮が当該の呪文やダイヤグラムの持つパワーを増すと考えられているからである。どうして白樺樹皮にそのような能力があるのか。それは、モンゴルのシャマニズムでは白樺樹と白樺樹皮を天の木と見なし、シャマンと天とが交流を持つときの介添えとなると考えられているからであり、実際、1990年代以降になり、モンゴル国の北部に居住するホリ・ブリアド人たちのところで復活しつつあるシャマニズム的儀礼において、白樺樹と白樺樹皮が天との関係を取り持つ機能を果たしている事例も確認されている（Ochir 2011：391, 384-385；Gongorjav 2011：346-359）<sup>10</sup>。このことから、白樺樹皮はモンゴル人の精神的生活を支え維持する能力を有していたといえるのである。

---

10 2009年8月、中国内モンゴル自治区エベンキ族自治旗で、エベンキ人女性の成巫儀礼に参列する機会を得た。その場では、モンゴル人が用いるテント式住居（ゲル）の中央の地面に立てた白樺の木を、天井に開いている取光穴（トーノ）から外に出していた。天と地上を結ぶ階段として用いているとの説明を受けた。

## (2) 白樺樹皮の実用的生活維持能力

筆者が現地調査したモンゴル諸部族とその東隣の少数民族（エベンキ、オロチョン、ダウール）の古老が記憶している、あるいは現物を確認した白樺樹皮製品の大半は「容器」である。この「容器」は白樺樹皮の防水性、防湿性、保温性、可塑性（柔軟性）を生かした製品である。白樺樹皮のとくに表層部には油分があることと、樹皮が多層構造になっていることがそのような特徴を生み出している。塩、砂糖、茶葉、裁縫道具、衣服など乾燥状態におくことが好ましいものや、茶、乳、ヨーグルト、果実など一定の温度を保ち水分が漏れぬことが望ましいものを入れた<sup>11</sup>。また、家屋の屋根や側壁、河川航行用の船、車の幌、靴やゆりかごの中敷きとしても用いられた。

また、上に紹介したように、伝統的薬品としての効用があることも知られている。筆者が現地調査を通して幾度も得た証言は、白樺樹皮の灰を家畜（時には人間）の下痢止めに使うという用法についてであった。白樺樹皮を密閉した容器に入れて熱して取れる油も薬として使えるばかりでなく、車両の潤滑油として使うとの報告もある<sup>12</sup>。

このように白樺樹皮は、モンゴル諸部族とその近隣の少数民族の衣食住を支える実用的な器物の原材料となってきたばかりか、医薬品としても用いられていた。白樺樹皮は実用的な生活維持能力を有していたといえることができる。

## (3) 白樺樹皮の従来の能力の衰退

上述した白樺樹皮を利用する文化は、筆者が調査した地域では急速に衰えていると言わざるを得ない<sup>13</sup>。

数ヶ月にわたる現地調査の間、モンゴル文字で書かれた白樺樹皮文献を所有している人物や白樺樹皮に文字を記していた事実を目撃・伝聞したことがある人物を尋ね歩いた。しかし、現に書写用材として白樺樹皮を用いている人物には遭遇できず、その現存も確認できなかった。白樺に書かれた経典を所有していると名乗る人物に会い、所有者の噂を聞く

11 モンゴル、新疆、内モンゴルでの現地調査を通じて、山仕事の時に、熱い茶を入れた白樺樹皮製の容器を携帯したものだということ話を幾度も聞いた。とくに、2009年8月に、中国内モンゴル自治区モリダワー・ダウール族自治旗阿爾拉鎮在住で、若いときには木こりと伐採木の筏流しに従事していたという老人に、その実物を見せてもらうことができた。

12 Ochir 2011 : 384。2008年8月、中国内モンゴル自治区モリダワー・ダウール族自治旗尼爾基鎮で面会した地元のダウール学会会員の男性老人（ダウール族）は、戦中、日本軍に徴用されて山中に入り、白樺樹皮を大量に採集したが、その理由は樹皮から油を取るのだと聞かされていた、と語ってくれた。

13 Ochir 2011 は、太古の昔からの白樺樹皮利用文化が、現在もなおモンゴルの一部地域に残っているという点を強調している。筆者は、同じ状況を全く別の見地から評価しており、白樺樹皮利用の現状はあちこち尋ね歩かないと見つからない状況にあることに着目しているわけである。

などの情報に接することができたにすぎなかった。一方、目撃・伝聞の類では、新疆ウイグル自治区昭蘇県在住の六十をこえた男性が、祖父からそのような話を聞いたことがあると答えてくれ、新疆ウイグル自治区のホム・ハナス・モンゴル族郷在住の元学校教員（女性）が、紙が稀少であった1940年代までは白樺樹皮に文字を書いて学習していたと語ってくれた。この証言から、筆者は、白樺樹皮の精神的生活維持能力は二世代前あるいは1940年代には失われたのではないかと見ている<sup>14</sup>。これは、いうまでもなく、紙の伝播によって白樺樹皮を用いる必要が徐々になくなったという全体的趨勢を背景としていえると考えられる<sup>15</sup>。よく知られている歴史的事実を踏まえると、次のような推論が可能である。すなわち、17世紀後半からモンゴル諸族と中華王朝（たとえば明朝）との関係が改善され、清朝治下の比較的安定した政治状況を背景に、中国方面で産せられる紙と木版による印刷物が普及した結果、当地の人びとが自ら山林に入って白樺樹皮を採取し、それを書写に適した状態に加工するのではなく、中国方面から持ち込まれる紙や自ら漉いた紙を徐々に使用するようになり、樹皮に記されていたテキストもそれに書き込まれるようになった。また、木版印刷によってテキストの大量コピーと頒布が可能になったことから、ことに民衆に歓迎される経典（人口に膾炙した経典）は大量に印刷されて入手が容易になった。こうして、それまでは白樺樹皮に記していた一部内容を紙文献によって獲得することや紙の上に維持することが可能となった。前世紀初頭以降のある一時期、とくに旧ソ連圏やモンゴル、中国では、白樺を神聖視するシャマニズムとその宗教的実践が厳しい制約を受けたので、この間に白樺に対する神聖視が衰え、当地の「白樺離れ」に拍車がかかった、という筋の推論である。しかしながら、筆者が現地調査した地域への紙の初伝時期や木版印刷による文献の流入と普及の過程は委細不明であり、先行して存在していた白樺樹皮を後発の紙が駆逐したとは確言できないのが実際の所である。筆者が共同研究に加わった、モンゴル国オブス県ブフムルン郡のタヴァグチーン・オラーン遺跡や同国ボルガン県ダシンチレン郡のハルボハ遺跡からは、白樺文書と並んで紙文書が出土している<sup>16</sup>。それぞれの出土層の確定が、今後の共同研究の進展に委ねられている現状にあっては、いずれが先行で後

---

14 2009年8月、中国内モンゴル自治区フルンポイル市エベンキ族自治旗バヤンタラ・ダウール族自治郷在住のダウール人男性老人は、子供の頃、満洲文字と思われる文字が書き付けられた白樺樹皮を祖父が持っているのを目撃したが、それ以外に文字の書かれた白樺樹皮を見たことがない、と語った。中国東北地方では、日中戦争期の中国東北地方で用いられていた政治教科書を大興安嶺で見た者がいるという（王2011：22）。

15 Ochirも指摘するように、書写材としての白樺樹皮はその丈夫さという点では紙をはるかにしのぐ優れた特徴を持っている（Ochir 2011：388）。

16 タヴァグチーン・オラーン遺跡出土の紙文書は、出土後に極度の乾燥状態におかれたため全壊してしまい、それに書かれていたテキストがどのような内容のものであったかを検証することができなくなってしまった。

発なのかを決定する段階にはない。上に紹介した中国新疆ウイグル自治区のホム・ハナス・モンゴル族郷の元学校教員の証言にもあったように、新疆ウイグル自治区北西部のように前世紀中盤になるまで紙が稀少だったところもあるのだから、そのようなところでは、紙や印刷技術の流入によって誰もが自由に紙を使えるようになったわけではなく、白樺樹皮に字を書き付ける行為も一掃されたとは思えない。また、旧ソ連やモンゴル、中国でシャマニズムが抑圧されたことで人びとの信心までもが根絶やしになることも考えがたい。おそらく、テキストの分量（たとえば、何百葉にも及ぶ大部の経典なのか、ほんの数葉で収まる呪文なのか）、テキストの用途（たとえば、寺院に安置されるものなのか、人家の間を持ち歩かれるものなのか、小僧の手習い用なのか）、テキストの使用主体（たとえば、寺院内で仏道と学問に励むラマなのか、寺院外で民衆の信仰上の要求に応じて遊行するラマなのか、手習いが必要な入門したてのラマなのか）などの条件によって、紙か白樺樹皮か、木版印刷本を手に入れるか手書きで済ますかが選択されていた時期を経て、今に至っているのではないだろうか。このように、書写材としての白樺樹皮と紙の関係はまだまだに不明な点を多く残しているのではあるが、こんにちの現実としては、書写材として白樺樹皮が使われることはほとんどないと言ってよい。したがって、白樺樹皮が担っていた精神的生活能力を維持する能力は衰え、すでに喪失されたと言ってよい状況にある。

もう一方の実用的生活を維持する能力もやはり衰えている。調査対象者に、家庭内にある白樺樹皮製容器具・製品の提示を求めたところ、現に実用の場にあるものはほとんどなく、提示された極少例の使用サンプルも家庭に最後に残ったものばかりであった<sup>17</sup>。運良く実物を残していた家庭でも、すでに実用段階にはなく、倉庫に埃をかぶっている状態にあることのほうが多かった。出来のよいものや比較的古いものは、持ち主の手を離れ、博物館に収蔵されている<sup>18</sup>。その代わりに彼らが使っているのは、陶器やプラスチックの容器具となった。軽くて丈夫で重宝という点では白樺樹皮製品と大して変わるところがないばかりか、白樺樹皮ほどの多様な効能を持たないプラスチック製の容器具が1970年代から彼らの生活の中に入ってきはじめた。中国東北部で聞いたところでは、そのようなものは1980年代以降になって一気に彼らのところ、あるいはその近傍に入ってきて、それを購入するようになったのであった。彼らにとっての新しい技術である近代的科学技術の産物（たとえばビニール、プラスチックなど石油化学製品）が、商品経済の仕組みに乗って、既存の白樺樹皮が担っていた実用的生活維持能力に取って代わったのである。中国東北地

17 2008年5月にモンゴル国ヘンティー県ダダル郡で塩を入れている容器の例を、同年8月に中国新疆ウイグル自治区アルタイ地区ホム・ハナス・モンゴル族郷でバターを入れている例を実見した。

18 2009年8月に中国内モンゴル自治区フルンボイル市エベンキ族自治旗ジダン・ガチャー（吉登嘎查）で、白樺樹皮製品をよく保存しているという話のあったエベンキ族の家庭を訪問したが、家長だった男性はすでに物故、彼が自作したものや、家に伝わってきた白樺樹皮製の容器具は全てエベンキ族自治旗博物館に所蔵されているとのことであった。

方のオロチョン、エベンキ、ダウール、ホジェンなどの少数民族の多くは、二十世紀五十年代初期に国の政策に従って山を下りて定住した。これによって白樺樹皮製品の必要性が薄らぎ、製作技術が衰えているという至極もつともな意見が見られる（王2011：76-77）。

写真10の左右は、中国内モンゴル自治区根河市阿龍山鎮の山中でトナカイを飼育するエベンキ族の瑪麗婭・索（マリヤ・ソルゴン）さんたちの獵民点の様態を撮影したものである。左の写真は、彼らが居住するテントである。めだって白く見えるテント外周材はビニール材である<sup>19</sup>。右は同じ獵民点で食事をごちそうになっているときに撮影したものである。写真の下部に写っている物のうち、木製なのは箸のみであり、それ以外は金属製の食器、ガラス製のコップ、陶器製の皿、プラスチック製の酒瓶（ペットボトル）が見えている。トナカイ飼いのエベンキ族のところでも、かつてはテントの外周には白樺の樹皮が、食器は木器、調味料入れには白樺樹皮で作られた器が使われていたはずである。しかし、筆者が見たところ、瑪麗婭・索さんたちの獵民点では、白樺の樹皮でものを作ることができるのはすでにかなり高齢となった瑪麗婭・索さんくらいしかいないという状況であった。瑪麗婭・索さんは筆者の求めに応じて、手元にあった樹皮で、エベンキの民族的意匠の型やトナカイを呼ぶための簡単な作りの笛をハサミで切り出して見せてくれた。定住生活に移行せず山中の森林にとどまる彼らのところでも、白樺樹皮製品の必要性はほぼなくなりつつある。

市場から遠く離れた山中では、白樺樹皮製品や木器は、彼ら自身の生活の場面で使われてこそ存在する価値を持つことができる。しかし彼らが、それにとって代わる他の材質の製品を購入あるいは交換して入手できるようになった。白樺樹皮文化の揺籃のひとつであった森林で、そこでの生活と結びついた白樺樹皮文化が、世代間継承の失敗と代替素材の流入で消え去りつつある。

### 3. 新たな「経済的現金収入能力」の獲得—資源価値の変化

以上のように、筆者が調査したモンゴル国や中国東北部、新疆北部では、従来の白樺樹皮の能力はかなり失われつつある。しかし、筆者が観察したところでは、現在の白樺樹皮は土産物用の容器・造形材料として用いられ、製品が市場に出回っている。つまり、白樺樹皮製品はまだ生き残っているのである。

モンゴル国ドルノド県バヤンオール郡で2008年5月に会った古老は、訪ねてきたわれわれの用向きを知ると、わざわざ一つ容器を作って見せてくれた。彼は伝統的な白樺樹皮製品の製作者ではなく、職を引退した後にその父が白樺樹皮で器を作っていたのを思い出

---

19 かつてはテントの外周には白樺の樹皮が用いられていた。筆者が訪問したとき、すべてのテントがビニール製の外被であった。

しながら、自分なりに製作法を身に着けたという。製作の途中で、古老の娘が部屋に入ってきて、怒りをあらわにしてわれわれに取材を中止するよう求めた。首都ウランバートルからやってきた商人が、老人の白樺樹皮容器作製技術で「パテント（特許）」を取れば一儲けできると教えてくれたが、われわれはその技術を盗もうとしているのだ、というのが彼女の怒りの原因であった。老人が、最後の仕上げに化学製品のにおいがぶんぶんする接着剤を樹皮に塗ったのを見て、確かに伝統的製法の継承者ではないと確信した。また、モンゴル国ヘンティー県ダダル郡で白樺樹皮油の採取の模様を見せてくれた男性の父親も、不自由な体をおして戸外に出てきて、よそ者であるわれわれに作り方を見せるのではないと激怒していた。このことから、白樺樹皮製品は経済的現金収入能力を持った、あるいはその期待を彼らに与えうる存在になったといえるであろう。また、遺跡と思われるところから出土した白樺樹皮片や文字の書き付けられた白樺樹皮片を単なる樹皮片とは見ず、それに学術的価値を見だし付与しようとしている研究者の行為も手伝ってか、モンゴル国では骨董としての価値が始め、収集・売買の対象になっていると聞く。

このような経済的現金収入能力は、その製品が清浄な大自然に生きてきた民族の伝統的生活文化や造形技術文化の象徴として自他に認知され、「清浄」・「自然」・「伝統」といった概念に裏付けられた象徴的価値が加わるところに拠っている。資源人類学でいわれる資源の象徴化に該当するものであろうか（内堀ら 2007：37）。以下、これを証していると思われる事例を紹介しておこう。

モンゴル国ヘンティー県ダダル郡の何人かが、かつては白樺樹皮製の食品入れを使っていたが、現在はプラスチック製容器を用いているというので、プラスチック製容器の良いところは何かをそれぞれに尋ねたけれども、返ってきた答えは、白樺樹皮で器を作ることができないので仕方なく体に悪い化学製品を使っている、というものだった。また、下で少し詳しく紹介する、中国内モンゴル自治区オロチョン自治旗阿里河鎮の民芸品店の店主は、最近になって見様見真似で白樺樹皮の器を作っている人は石油由来の接着剤を使っているが、伝統的な方法を知っていればそのような体に悪いものを使わなくてすむので安心して使ってもらえると言って、すべてを糸で縫い合わせた器を見せてくれた。これらの発言に見えている「体にいい／悪い」というのは、「伝統」的製法による白樺樹皮製の器は「清浄」な「自然」原料だけを使っている、という彼ら自身の理解を反映しているものである。

写真 11 は、上で簡単に言及した、中国内モンゴル自治区オロチョン自治旗の阿里河鎮の博物館に直面したところに位置する民芸品店の外観（左）と店内の様子（右）である。この店を営んでいるのは、オロチョン族の若い男性であるが、店頭で説明・販売に携わっているのはエベンキ族の配偶者である。この男性が開店を決意したのは、母親や祖父母ら、オロチョン族やダウール族の古老が諾敏河流域の奥地で作り続けてきた白樺樹皮製品や毛皮製品などの森林の産物が作られなくなりつつあることを残念に感じたからであるという。2009 年の調査の時点では、白樺樹皮を材料に、切貼・焼入画、花瓶、筆立て、茶筒、

宝石箱、バックパック、大小容器、メモ帳、アルバム、写真立てなどを制作販売していた。また、つい最近のこととして、いずこからかの依頼で白樺樹皮船を制作したことを話していた。この民芸品店で販売されているものの中には、おそらく彼らの祖父母の時代には山林では一般的ではなかったであろうアルバムや写真立て、メモ帳などがある。しかし、切り抜き片<sup>20</sup>が切貼画に、筒が花瓶・筆立て・茶筒に、箱が宝石箱・大小容器に、袋がバックパックに、というように、伝統的に作られてきた製品を現代的に応用した新時代の製品が多いことに気がつく。

それら製品の「前身」は、大自然に生きている民族が大自然に生きる中で用いるもの、つまり生活用具であった。今やその「前身」は商品となって店頭には並んでいるのであって、民族の元来の生活実践から切り離された専門の工房で、売るために作られた自然を知らない商品である。しかしそれが「伝統」的製法によるものであれば、「清浄」な「自然」を身に帯びた価値のある物品となる。これは、伝統的製法がどのようなものであったかを知っている者が持っている、伝統にたいする観念である。伝統的製法を知らない“よそ者”の目には、森林で採取された白樺樹皮の製品というだけで、そのような伝統的な製法に抛らない「粗悪品」であっても、「清浄」な「自然」を身に帯びた価値のある物品と認識される可能性がある。

筆者が調査した人々やそのような人々によって構成される民族は、森林という自然の中での生活を通じて白樺樹皮利用の文化を形成した。今やその文化は、自然（森林）の生活から乖離したところで命脈を保っているといつてよい状況にある。ならば、元来あったその文化の意味は喪失へと向かっているといわざるを得ない。そのような、伝統的生活が失われた状況・状態のもとで作られた商品（土産物）は、その伝統的生活に供されない目的で作られたという点で、二重に民族の文化を喪失している存在ともいえる。このような商品（土産物）に関与する人々の中では、わずかに、前代の造形・製作技術を受け継いでいるその製作者だけが民族の文化を保持しているといえよう。そのようにかろうじて保持されている伝統的造形技術によって作られた白樺樹皮製品は、元来あるはずの自然（森林）の生活から乖離しても、観光客のような“よそ者”は言うに及ばず、元来は“森林の民だった者”にとっても、「清浄」な「自然」を身に帯びた価値のある物品となっているのである。

#### 4. なぜ「白樺樹皮を取らない」か？

現在、筆者が調査した対象者らは、何らかの理由で自ら森に入って樹皮を採取しなくなったと言う。その理由を中国東北地方の古老に尋ねたところ、「森が遠くなった」という意

---

20 ある模様に切り抜いて何らかの装飾に用いた白樺樹皮を指す。Dschingis Khan : 55 には棺桶の装飾として用いられたと説明される切り抜き片の写真がある。

味深長な答えを返してくれた人がいた。壮年の人に同じことを尋ねると「自然保護の観点から政府が禁止しているから取らない」との返答が聞かれた<sup>21</sup>。

「森が遠くなった」とは、二つの意味が込められた発言であった。一つは、森林の減少を指して言ったものである。真偽のほどは不明だが、内モンゴル自治区エベンキ族自治旗を縦に流れるイミン河に沿うバヤンタラ・ダウール民族郷やシネヘン・ブリアドの老人の何人かが、自分が子供の頃は目の前にある山には木が生い茂っていた、と語ることがあった。もう一つは、自分が高齢の域に達し、森に到達することが難しくなったことを踏まえての答えであった<sup>22</sup>。こうした高齢者と森林との心理的距離感は、かえってかつての豊かな、あるいはそのような状態を保つことができていたころの森林の有様を浮き彫りにする。

これとはやや異なり、中国東北地方の壮年たちの「自然保護の観点から政府が禁止しているから取らない」とは、政治的現実としての「東北・内蒙古等重点工業国有林区天然林資源保護工程実施法案」（2000年12月）と「天然林資源保護工程管理辦法」・「天然林資源保護工程核査驗取辦法」（二つとも2001年5月）<sup>23</sup>による天然林資源保護工程の実施をうけての発言である。中国東北地方における天然林が衰えていることは、北東アジアが直面する明白な環境問題、社会問題としてよく知られた部類に属するだろう。

上を簡単にまとめてしまえば、北東アジアの森林が経験しつつある乱伐のせいで「《森が遠くなった》から取らない」状況に加え、乱伐で痛んだ森林を大事にするための保護策のせいで「《禁止された》から取らない」という図式になる。このような図式が事実であれば、彼らは森には入って行けず、入ったところで勝手に樹皮を採ってくることができないうことになる。

筆者はまだ、中国の関連法規で樹皮の採取がいかに規定されているかをまだ調べ切れていないが、中国東北地方では、白樺樹皮の剥離採取自体は禁じられておらず、白樺樹皮の獲得は難事ではないという声が多く聞かれた。中国内モンゴル自治区オロチョン自治旗阿里河鎮在住の民族衣装などをつくる工芸職人は、樹皮は製材時に出るゴミ（廃棄物）なの

21 2008年5月に会ったモンゴル国ドルノド県バヤンオール郡の古老も、今は勝手に木を切ったり傷つけてはならなくなったと語ったが、実際のところ、多少の樹皮を取る程度は問題ないとのことであった。

22 かつてあった森林がかなり失われたところである中国内モンゴル自治区エベンキ族自治旗バヤントホイ鎮（南屯）や樹木がほとんど見あたらない同自治区の新バルガ左旗の老人たちは、それぞれ200kmから300km近く東方のオーニン・アルシャンという鉱泉の湧くところまで牛車を連ねて数日かけて出かけ、そこで当年の用に用いる分の白樺を含む生木を伐採し、樹皮はそのときに得ていたという。現在では白樺の植生が確認されない地域でも、材木調達の際に樹皮を獲得していたことがわかる。

23 中国の天然林資源保護工程とそれが該当地区の人々に与えた影響については、森林総合研究所2010：203-220を参照。

で、製材所に行けば簡単に手に入るが、うまいタイミングでもらいに行かないと燃やされたり廃棄されたりしちゃうし、木材業者の多くは樹皮を丁寧に剥離してくれないところが多く、よくよく頼んでも面倒がって工作に使えるように大きくきれいに剥ぎ取ってくれないという。

白樺樹皮の採取の合法・違法はさておき、その獲得には一定の困難さがあるとはいえ、中国東北地方でもモンゴルでも、確実にそれを必要とする人のところに届いているので、土産物屋や民族工芸品店の店頭で白樺樹皮製品が並び、お上に咎め立てされることなく営業が可能となっているわけである。中国東北地方で現に樹皮を所有している者にその入手方法をたずねると、製材業者に安く売ってもらうとか、森に入った知り合いに分けてもらったと返答するのみで、特定の入手先や方法を明かすことまではしなかった。このような返答は、中国東北地方で聞かれた声として上に示したように、樹皮はゴミ（廃棄物）であるという見方や採取禁止対象外とする見方と大きく矛盾するところはない。筆者は、白樺樹皮がゴミ（廃棄物）となっている現場を見ることはできなかったが、内モンゴル自治区根河市で直接入った森林や移動の車中から見えた森林の白樺の中には明らかに樹皮を剥がされた痕跡をとどめるものがあった。やはり、白樺樹皮を得ている人びとはいるはずである。筆者の調査対象となった人々の中に白樺樹皮をもっとも容易かつ合法的に得られると目される林業者は含まれていなかったのも、森と白樺樹皮との距離感を訴える彼らは、得ようと思えば得られる樹皮を積極的に得ようとし、権利関係や森林までの実際距離、そして年齢による体力・気力の衰えのために、得たくても得ることができない状況にある人びととすることができよう。

白樺樹皮入手にかかわる事実の検証は措いても、長年白樺とともに生活してきた古老には、森林が減少したとの認識がある。存命の古老が見てきた森林（樹木）の減少は、戦前にはロシア人と日本人、戦後は新中国による半世紀にわたる無秩序な伐採が大きく影響しており、国家建設や開発を背景とする木材の経済的価値の獲得が理由である<sup>24</sup>。奥深い森林にも商品経済が及び、樹木だけではなく森林のあらゆる恵みが現金化可能となったために<sup>25</sup>、森林は略奪され減少・疲弊し、今は手厚い保護の対象となってしまっており、白樺樹皮は採れなくなった。こういうストーリーができあがって、結果として白樺樹皮はあたかも枯渇資源であるかのような印象をもって捉えられている。

筆者が調査したモンゴルと中国東北地方、新疆における商品経済の拡大とそれともなう自然（森林）の喪失は、そこからの恵みに依っていた北東アジアの一部民族からその生活的文化的基盤を奪い去りつつあることは確かである。そのような基盤への根ざし方と愛

---

24 平野 2008 : 49-50、深尾 2009 : 2-13、永井 2009 : 19-60。

25 2009年8月、内モンゴル自治区根河市の大興安嶺地域での調査の際、保護林とされている森林に自転車でも乗りつけて、特用林産物となっているキノコや木の実を採取している人々を多く見た。

着が浅い者、たとえば若年層にとって、それに拠らない生活への移行は容易であるので、若者の森林離れが起り、森林発伝統文化保持者の高齢化が発生する。高齢者は心理的・体力的に遠くなった森を思いこそすれ、そこへは出かけないし、業者に金を払うことや、業者に入手方をよくよく頼み込んでまでして樹皮を購って、手間をかけて製品を作ろうとはしなくなる。そのような金があるのなら、身近なところで安価で売られている大量生産品を買えばよいからである。

上述したように、白樺樹皮製品が元来持っていた実用的生活維持能力は、貨幣経済や商品経済がもたらした代替品にその能力を譲ったが、いまや白樺樹皮文化は、商品経済がもたらした伝統的文化資源の象徴資源化と商品化によって生き残っており、消滅はしていないのである。その生存を支えているのは“顧客”である。この場合の“顧客”とは、当地人たちの周辺では《すでに失われた／失われつつある森林》と、自分たちの身体には備っていない《大自然の中に生きることができる（と信じられている）民族の文化》を憧憬して求める都会人や内外から来る観光客であると考えてよい。彼らの目には、白樺樹皮製品は自然と民族の生活文化の象徴に他ならないと映るのである。ここで貢献するのは、単なる木の皮でできた生活用品に何らかの価値を発見して資源化して顧客に提供する仲介者である。この仲介者は、商売人の場合もあろうし、メディア関係者や研究者も加えてよからう。

この「何らかの価値」を高めているのが、白樺樹皮にまわりついている「稀少性」である。上述したように、白樺樹皮自体はかならずしも枯渇してはいない。方法を工夫すれば、絶滅寸前の動植物を手に入れるよりはるかに簡単に採取・入手できる（王 2011：59，80-81，92-93）。にもかかわらず、事実としての森林衰退、中国における森林環境保護策の厳格な実施、そしてそれを後押しする“環境保護”の正当な主張が、白樺樹皮までも稀少資源化し、古老との物理的・心理的距離を広げ、彼らを白樺樹皮製品製作から遠ざからせる。一部言われているように、継承者が少ないことも確かであろうが、作れるはずの古老が作らないので継承がうまくいかないという問題のほうがより深刻であろう。いまや、こうした古老を再び製品制作に呼び戻すことができるのは、森林から距離を置いた若年層の伝統文化保護への意欲とそれに基づく商行為であるという実例から考えるに、ここに古老が集わないと、白樺樹皮製品にまわりついている“絶滅寸前”という現実とはやや異なる寂しいストーリーが現実化する危険性が高まるだろう。

白樺樹皮製品は異なる担い手を得て、森から街へ、自家用品から他者販売用へ、個人の生活から不特定多数の観光客・文化愛好家の所蔵へと移り変わりつつ生き残っていく。このような自然とその資源化（商品化）による破壊がもたらした民族文化の衰退が、白樺樹皮に絶滅寸前というストーリーを与え、そのストーリーの上に装いを新たにした民族文化（らしきもの）が生存しているのである。

## おわりに

未だに調査は十分ではない。とくにロシア側の状況を調査できていないことを遺憾としつつも、モンゴルと中国で白樺樹皮を追って得たところを、北東アジア学の可能性を示す例として紹介してきた。本稿の考察で取り上げた白樺樹皮利用の文化が、北東アジア地域に特徴的に存在する研究課題であることはある程度明らかになったのではないか。冒頭に示したように、この地域に生起している問題群を複合的<sup>26</sup>かつ超域的<sup>27</sup>に捉えて学際的<sup>28</sup>にアプローチしなければならない研究課題であるとの自覚が筆者にはあり、そのような方向でいっそうの展開が可能な課題であると考えている。

最後に立てる問いは、白樺樹皮のような天然・生態資源利用に着目した北東アジア学はどのような可能性を持っているかということである。とりあげた問題は、従来からあった森林文化の衰えが後発の商品経済と“環境保護”に関係していることを浮き彫りにしている。現今の趨勢から見て、商品経済や“環境保護”が従来の森林文化に優越していること、そして森林文化の価値はそれ自体にあるのではなく、今は商品経済や“環境保護”によって付与されていると見てよい。つまり、何らかの優位を保持しているアクターによって相対的に劣位にあるアクターは如何に価値づけられ、それを内面化し、優位アクターを支えることで自らの存在を保持していくか、ということを目前に示している。もう少し広くとらえると、この場合の優位とは「大国」「マジョリティー」に代表させることができる。よって、「相対的に劣位」とはそれらの対概念を想定してよい。北東アジア地域では、近代以降、優位アクターが相対的劣位アクターにたいして暴力的・破壊的アプローチのもとで一定の価値を与えてきたが、アクターは変化しても、優から劣へのアプローチが現在もなお継続している。このような“優位劣位の相互連関”を北東アジア地域では問うことができるのである。たとえば、日本・中国（漢）・ロシアと小国・少数者の歴史的・現代的関係や、現代的物質文化・商品経済・環境保護政策とその担い手を受け入れて内面化しそれらに合致した新たな価値を獲得してゆく伝統的在来文化の変容過程と生存戦略といった研究課題を考えることができよう。

## 参考文献

Chiodo, Elisabetta. *The Mongolian Manuscripts on Birch Bark from Xarboxyn Balgas in the Collection of the Mongolian Academy of Sciences*, pts. 1-2, (Asiatische Forschungen 137) Wiesbaden, 2000-2009.

---

26 環境（森林環境）、社会（民族社会）、文化（伝統文化）、歴史（歴史的展開）の面から複合的に問題を捉えている。

27 国家・民族・宗教・外来文化というそれぞれの要素がもつ域を超えて問題を捉えている。

28 歴史学、人類学、社会学、環境論、資源論といった学問領域を意識している。

- Dschingis Khan und seine Erben: Das Weltreich der Mongolen*. Bonn, 2005.
- Erdenebat, U. *Mongol ehneriin bogtag malgai*. Ulaanbaatar, 2006. [U・エルデネバト『モンゴル婦人のボグタグ帽』]
- Gongorjav, G. *Mongolchuudyn modon öv soyol*. Ulaanbaatar, 2011. [G・ゴンゴルジャヴ『モンゴル人の木の文化』]
- Ligaa, U. *Mongolyn ulamjlalt emnelegt emiin urgamalyg heregleh arga ba jor*. Ulaanbaatar, 1996. [U・リガー『モンゴル伝統医学薬草の使用法と処方箋』]
- Heissig, Walther. *Die mongolischen Handschriften-Reste aus Olon süme, Innere Mongolei (16.-17. Jhd.)*, (Asiatische Forschungen 46) Wiesbaden, 1976.
- Ochir, Taijiud Ayuudain. "Mongolchuudiin üisnii soyol", *Mongolyn tüühiin sudalгаа*, ded bot', Ulaanbaatar, 2011: 380-394. [タイジウド・アユウダイン・オチル「モンゴル人の白樺樹皮文化」『モンゴル史研究』下巻]
- 阿部信行・V. A. ソコロフ・I. M. ダニリン『シベリアの森林:ロシアと日本のアプローチ』J-FIC、2004年。
- 内堀基光・菅原和孝・印東道子『資源人類学』財団法人放送大学教育振興会、2007年。
- 王益章・王鉄峰『白樺遺韻:中国北方桦皮文化』黑龙江人民出版社、2010年。
- 岡田陽一(訳)「中国大興安嶺の狩猟民族の樺樹皮器物の装飾文様図録」、『自然と文化』71:2002年、14-15頁。
- 萱野茂『アイヌ・暮らしの民具』クレオ、2005年。
- 森林総合研究所『中国の森林・林業・木材産業』J-FIC、2010年。
- 蘇日台「中国大興安嶺の狩猟民族の樺樹皮文化」、『自然と文化』71:2002年、4-15頁。
- 永井リサ「タイガの消失」、安富歩・深尾葉子(編)『「満洲」の成立:森林の消尽と近代空間の形成』名古屋大学出版会、2009年、19-60頁。
- 名久井文明『樹皮の文化史』吉川弘文館、1999年。
- ナチン バータルピレグ「解説!モンゴルの森林」、『日蒙環境ソニン』3(2010):2-3、北海道大学大学院環境科学院グローバルCOEプロジェクト支援ユニット。
- 平野悠一郎「森が資源となるいくつかのみち」、佐藤仁(編著)『人々の資源論』明石書店、2008年、39-64頁。
- 深尾葉子「バイコフに捧ぐ」、安富歩・深尾葉子(編)『「満洲」の成立:森林の消尽と近代空間の形成』名古屋大学出版会、2009年、1-15頁。
- [付記] 本稿は、鹿島学術振興財団平成12～13年研究助成「モンゴル国オブス県発見白樺樹皮文書の保存と研究」(代表:吉田順一)、三菱財団平成15～17年度人文科学研究助成「モンゴル国ボルガン県発見白樺文書の保存と研究」(代表:井上治)、科学研究費補助金2006年度～2009年度基盤研究(B)18401016「モンゴルの白樺樹皮文献と白樺樹皮文化に関する調査研究」(代表:井上治)、科学研究費補助金2011年度～2013年度基盤研究(B)23320155「新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成」(代表:松田孝一)による研究成果の一部である。

キーワード 北東アジア地域研究 モンゴル 新疆 中国東北地方 白樺樹皮

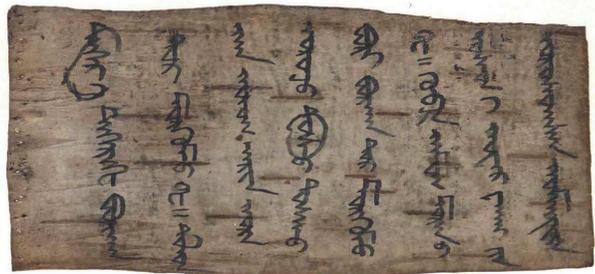
(INOUE Osamu)



〈地図1：白樺文書の出土地点（青）〉

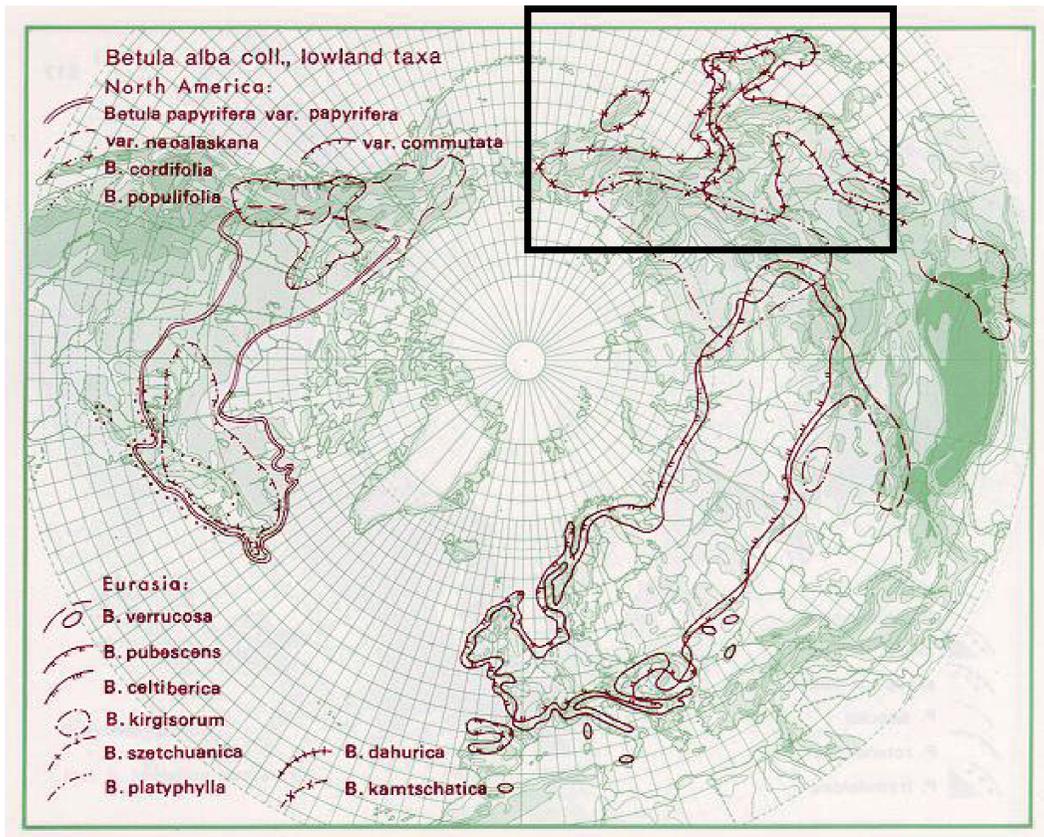


〈写真1：白樺文書が出土したところ（左）、修復後の白樺文書（右）〉



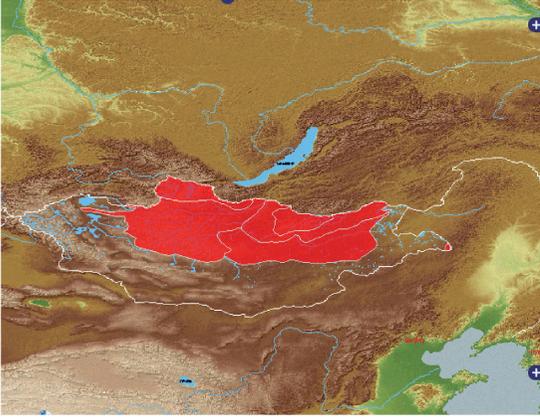
(A・オチル氏提供)

〈地図2〉

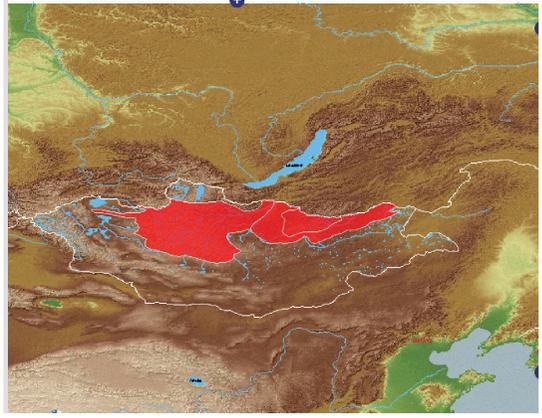


(<http://linnaeus.nrm.se/flora/di/betula/betul/betunanv.jpg> [2012/01/09 最終アクセス])

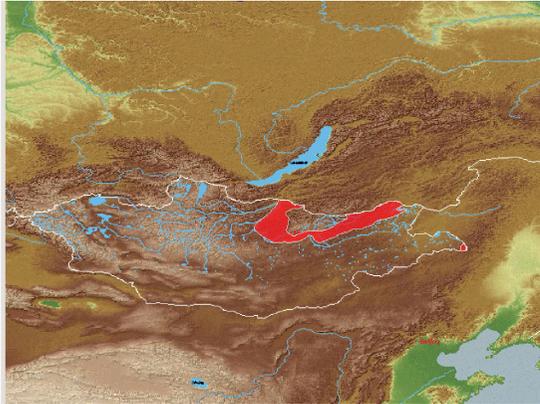
〈地図 3-1〉 *Betula platyphylla* Sukacz.



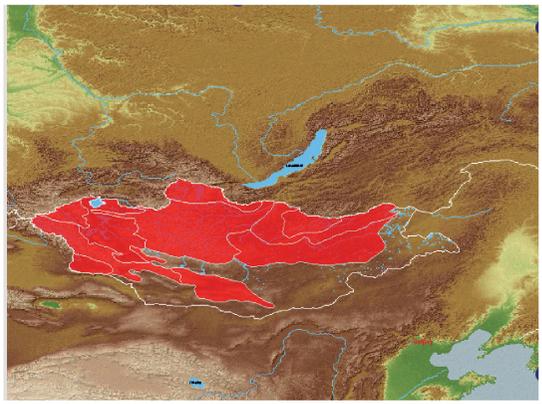
〈地図 3-2〉 *Betula hippolyti* Sukacz.



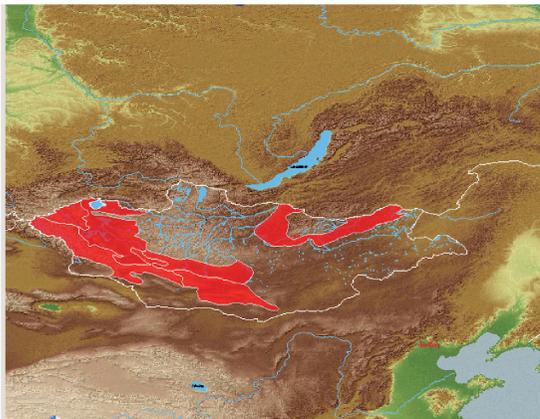
〈地図 3-3〉 *Betula mandshurica* (Regel) Nakai.



〈地図 3-4〉 *Betula microphylla* Bunge.



〈地図 3-5〉 *Betula reznitzenkoana* (Litv.) Schischk.



(University of Greifswald, Institute of Botany and tinuLandscape Ecology, Institute of Geography and Geology, Computer Centre, 2010- (conously updated). FloraGREIF-Virtual Flora of Mongolia (<http://greif.uni-greifswald.de/floragreif/>). Computer Centre of University of Greifswald, D-17487 Greifswald, Germany. [2012/01/09 最終アクセス])

〈写真2〉



(Dschingis Khan: 89)

〈写真3〉



(モンゴル国立歴史博物館所蔵. 筆者撮影)



〈写真4〉



(モンゴル国立歴史博物館所蔵. 筆者撮影)

〈写真5-1〉



(新疆ウイグル自治区アルタイ地区. 筆者撮影)

〈写真5-2〉



(新疆ウイグル自治区アルタイ地区、筆者撮影)

〈写真5-3〉



(新疆ウイグル自治区アルタイ地区、筆者撮影)

〈写真6-1〉 ダウール



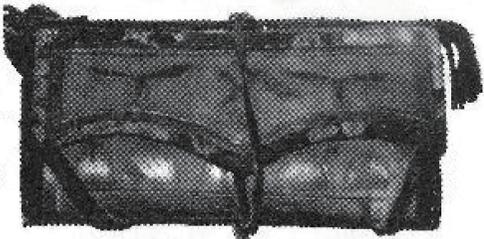
(『自然と文化』(71)、2003年)

〈写真6-2〉 オロチョン



(『自然と文化』(71)、2003年)

〈写真6-3〉 エベンキ



(『自然と文化』(71)、2003年)

〈写真7-1〉 アイヌ



(萱野 2005)

〈写真7-2〉シベリア



(<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/centralnorthasia/07.html> [2012/01/09 最終アクセス])

〈写真7-3〉ロシア



([http://japantorg.sakura.ne.jp/sblo\\_files/jtj/image/838D83V83A93y8EY814094928A9282CC94E78140shutterstock\\_1932269.jpg](http://japantorg.sakura.ne.jp/sblo_files/jtj/image/838D83V83A93y8EY814094928A9282CC94E78140shutterstock_1932269.jpg) [2012/01/09 最終アクセス])

〈写真8-1〉ヒマラヤ



(<http://www.asianart.com/articles/batton/index.html#fig1> [2012/01/09 最終アクセス])

〈写真8-2〉チベット



(<http://www.ruyihai.cn/wp-content/uploads/2009/09/4673c3737558b2295f5086904.jpg> [2010/07/03 最終アクセス])

〈写真8-3〉ロシア



(<http://gramoty.ru/prorisi/bb202.gif> [2010/07/03 最終アクセス])

〈写真8-4〉スウェーデン



([http://www.swedesincanada.ca/issue\\_6\\_english.html](http://www.swedesincanada.ca/issue_6_english.html) [2012/01/09 最終アクセス])

〈写真8-5〉朝鮮半島（左右とも）



([http://www.scienceall.com/nas/board/00000063/image/20080310\\_tTFwz125.jpg](http://www.scienceall.com/nas/board/00000063/image/20080310_tTFwz125.jpg)  
[2010/07/03 最終アクセス])

〈写真9-1〉樹皮繊維：和紙



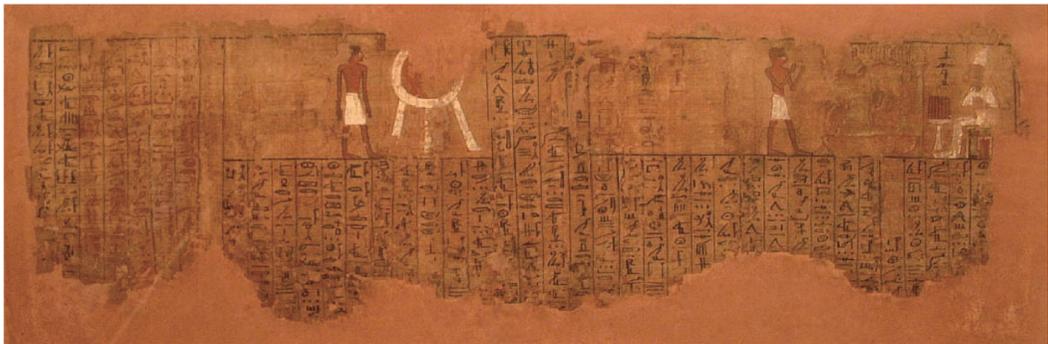
〈写真9-2〉葉：貝多羅



([http://www.ozuwashi.net/shop/goods\\_image/A2161\\_Z2.jpg](http://www.ozuwashi.net/shop/goods_image/A2161_Z2.jpg) [2012/01/09 最終アクセス])

([http://www.peopleschina.com/zhuanti/2009-07/22/content\\_208670\\_2.htm](http://www.peopleschina.com/zhuanti/2009-07/22/content_208670_2.htm) [2010/07/03 最終アクセス])

〈写真9-3〉茎：パピルス



(<http://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/virtual/shomotsu2/02.jpg>  
[2012/01/09 最終アクセス])

〈写真10-1〉



〈写真10-2〉



（中国内モンゴル自治区根河市にて筆者撮影）

〈写真11-1〉



〈写真11-2〉 女性は白樺樹皮器の作者（オロチョン族）



（中国内モンゴル自治区オロチョン自治旗阿里河镇にて筆者撮影）